

Title	トマス・ジェファソンの経済思想(1)
Sub Title	Thomas Jefferson's economic thought (1)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.8 (1976. 12) ,p.627(19)- 640(32)
JaLC DOI	10.14991/001.19761201-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19761201-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トマス・ジェファソンの経済思想 (1)

白 井 厚

1. 思想形成
2. 農業者ジェファソン
3. 農本主義者ジェファソン

1. 思想形成

アメリカ東部を南北に走る Appalachia 山系の一部 Blue Ridge 山脈には、有名な Shenandoah 国立公園があり、シェナンドアの谷を望んだ春秋の景観は殊に雄大で美しい。そのあたりがアメリカで最も古い植民地の歴史を持つヴァージニア州で、山脈の東側の起伏に富んだ丘陵地帯を Piedmond (山麓) 地方と言い、さらにその東側の海岸に近いあたりを Tidewater (沿海) 地方と呼びならわしている。イギリス人の植民者たちは、まず、1607年に James 川の川口に近いところに Jamestown を建設し、この命の川を次第に丘陵地帯へさかのぼって西漸運動を展開した。ジェファソンの頃には、沿海地方が大西洋経済圏に属し、大プランターが多く、貴族的、親英的だったのに対し、丘陵地帯においてはプランターも小規模で、交通の困難さの故に経済的にも自主独立の気風が強く、開拓民と接するためにデモクラティックであった。

ジェファソンの曾祖父は、ジェイムズ川を100キロほどさかのぼったあたり (州都Richmondの東) に住む自営農であった。祖父 (1677-1731) の代になると、ジェファソン家はプランターに上昇、西漸して土地を求め、さらに西に移った父 Peter Jefferson (1707-57) は測量師として成功したのみならず、その才能と努力によって、また名家 Randolph の娘と結婚し信用を増したことによって、民兵中佐、郡行政官、治安官、郡選出植民地議会議員などを歴任した。50歳で死んだ時には、約7500エイカの土地と40人ほどの奴隷を持つまでになったので、ジェファソン家はジェイムズ川を西へさかのぼるにつれて社会的地位も上昇した、と云うるであろう。

ジェファソンが生まれた地は、丘陵地帯で、今の Albemarle 郡 Shadwell である。父はここに
“三番目か四番目に入植した”⁽¹⁾ ので、入植当時は狼の声が聞こえるような淋しい所であったろうが、

注(1) *Autobiography of Thomas Jefferson*, with an introduction by Dumas Malone (Capricorn Books, N. Y.), p. 20.

ジェファソンは決していわゆるフロンティア開拓民の子ではなく、⁽²⁾ れっきとした支配階級の子、プランターの子であったことが、まず強調されなければならない。従ってジェファソンの思想を規定する第一の要因は、このプランターという階級、もう少し詳しく言えば、西漸と共に地位が上昇し当時の最西端のプランテーションを經營するに至った活動的な中堅プランターという階層である。父は、奴隷労働の搾取によって得た富を基礎にして郡の政治権力に参加し、しかも開拓民に隣接するところまで進出した“marginal(周辺)プランター”であった。

ジェファソンは、プランターの支配が次第に自然と融け合う比較的単純な社会に17歳まで育ったが、長ずるに及んで隣接する西の開拓者の社会に飛び込むのではなく、逆に東に戻り、リッチモンドの近くでまずスコットランド人 William Douglas から古典教育を受け、さらに別の師についても当時の植民地の都 Williamsburg に出て College of William and Mary に入学、かくて南部植民地における最高の教育に恵まれた。その地位を利用して卒業後も最高の知的社交を楽しみえたのだから、まさに“人間の自由に関する彼の偉大な著述を可能ならしめた閑暇は、三代にわたる奴隷たちの労働によって支えられた”⁽³⁾ ののである。

ジェファソンが入った大学は、1693年創立でアメリカではハーヴァドにつぐ伝統を有するが、当時はこれを運営していたイギリス国教会の勢力が弱まり、合理的な啓蒙思想が広まって新しい時代の夜明けを用意していた。科学的な訓練にかけてはハーヴァドとイエールに匹敵していたといわれ⁽⁴⁾ る。特にジェファソンの師となった William Small は、この大学において国教会牧師でない唯一

注(2) “この地域に多くの人が住むようになると、数千エイカの土地とそこに働く奴隷を持つ大企業家と、100 エイカ以下の土地しか持たぬ多数の小農とのギャップが広がった。これは、イギリス領ヴァージニア流のフロンティアで、ピーター・ジェファソンの資産と事業程度の中流の人には自由で開放的だったが、アメリカのフロンティアについていつも言われるような平等化作用とは真向から対立するものであった。もし彼の息子がフロンティアの力を感じとったとしても、もし西部が絶えず彼の心を捕えたとしても、それはディモクラティックなフロンティア社会で育ったからではない。” Merrill D. Peterson, *Thomas Jefferson and the New Nation, a Biography* (N. Y., 1970), pp. 5-6.

“ピーターは、けっしていわれるような辺境農民ではなく、野心と覇気にみちたプランター=ジェントルマンであった。” 富田虎男「ジェファソン——アメリカ独立革命——」, 1961年, p. 27.

それにもかかわらず、ジェファソン=辺境農民、というお伽話がいまだに見られる。たとえば、

“辺境開拓者の子であったトマスには、農耕のための土地に対する関心と、開拓者生活の自由と自治とがほとんど生まれつきのものであった。それは後年、政治家ジェファソンとなつてからの活動においても、その主観的因子となっている。” 松本重治「アメリカ民主主義思想の原型」, 「世界の名著33, フランクリン, ジェファソン, マディソン他, トクヴィル」所収, 1970年, 30ページ。

“ジェファソンは、この典型的な辺境開拓者を父にもち、そのきびしい生活態度と愛情にみちた指導のもとに成長した。……若きジェファソンは、斧をふるって原生林を開拓し、鋤を手にして農耕にいそむ生活のなかから、土地に対する無限の愛着と、フロンティア社会にみなぎる自由と自治の精神を、その人生の基調として身につけていった。” 阿部行蔵「トマス・ジェファソン」, 「前衛」No. 324, 1971年6月号。本田・江口・浜林編「進歩と革命の思想」西洋編, 上, 1972年所収, 90ページ。神話はこうしてつくられる。

(3) Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men who made it*, 1948, p. 19. 田口富久治, 泉昌一訳「アメリカの政治的伝統——その形成者たち——」, 1959年, 22ページ。(訳文は必ずしも邦訳によらない。以下同じ。)

(4) Richard Beale Davis, *Intellectual Life in Jefferson's Virginia* (Knoxville, 1972), p. 61.

の教師であり、ジェファソンに物理学、形而上学、数学、倫理、修辞学、文学などを教え、自由な合理的・科学的精神を彼に吹き込んだ。⁽⁵⁾ ジェファソンがのちにあらゆる方面に科学的精神を燃やし、実験・観察・発明・工夫を続けた原動力は、主にこの師から与えられたと考えられよう。またジェファソンが入学したのはスミスの「道徳情操論」が出版された翌年であり、スモールはスコットランド人であって、当時の大学をめぐる知的環境はスコットランド啓蒙哲学の影響を受けていたと見られる。ジェファソンはスモールによって Kames 卿の神学、道徳哲学、法理論を教えられ、Shaftesbury 卿や Francis Hutcheson の “moral sense” school 学派に共鳴していた。⁽⁶⁾ スモールについての記録は乏しいが、スコットランドに帰国後 James Watt の友人になって蒸気機関の改良に協力したと伝えられる。⁽⁷⁾

大学を卒業したジェファソンは、弁護士として、プランターとして、また政治家として、さまざまな経済問題に直面することとなった。まず1767年弁護士となり、当時シェナンドアの谷に定住していた開拓者たちとプランターとの対立、プランターの土地投機、相続権などの問題が、彼の目を経済に対して開かせ、またそこで接触するさまざまな職業、階層の人たちが、彼に人間を見る眼を養わせたと思われる。

そして弁護士となった翌々年、植民地議会議員に当選したことによって、彼の長い政治経歴が始まった。それは同時に、砂糖条例、印紙条例、タウンゼンド諸条例と続いた本国議会の課税に対して植民地が実力を行使し不買同盟を結成して抗争していた時なので、彼の政治経歴は、経済問題を契機とする独立・建国の大事業への輝しい献身となった。そして彼は、立法者として、外交官として、また行政責任者として、やや不得手であったにも拘らず、本国の重商主義政策批判からインフレ、武器・物資調達、土地制度改革、通商交渉、公債問題、中央銀行問題、通貨政策、輸出入統制などさまざまな深刻な経済問題を手がけることになり、彼のとった経済政策のいくつかは、彼の政治的、思想的影響の大きさのゆえに、今日に至るまでその伝統を及ぼしているのである。

注(5) スモールについてジェファソンは「自叙伝」で回想する。“その時、スコットランドのウィリアム・スモール博士が数学の教授であったということは、まさに私の大きな幸運であったし、またおそらく私の人生の運命を決めた。彼は広く科学の応用面において深い知識を持っており、人と交流するのに素晴らしい才能を備え、きちんとした紳士的なマナーを身につけ、そして広い自由な心の持主であった。彼は、私にとっては最も幸せなことに、私の担任になり、大学の仕事がない時には私を毎日の話相手とした。そして彼との会話から、私は科学の発達およびわれわれを取り巻く事物の体系についての見方を初めて教えられた。幸いなことに、私が大学に入ってからすぐに哲学教授が空席となり、彼は暫くその椅子につくよう指名された。そして彼はその大学では、倫理学、修辞学、美文学を正規に講義した最初の人であった。” *Autobiography*, p. 20.

スモールは、“他のどの教師よりも、ウィリアム・アンド・メアリの特徴となるに至った自由な精神に貢献したといわれてきた。” Dumas Malone, *Jefferson and his Time*, Vol. I, *Jefferson the Virginian* (Boston, 1948), p. 55.

(6) M. D. Peterson, *op. cit.*, p. 55. Adam Fergusonの後任としてエディンバラ大学道徳哲学教授となった Dugald Stewart と、ジェファソンは後にパリで友人となった。 *ibid.*, p. 977.

(7) R. B. Davis, *op. cit.*, p. 51.

2. 農業家ジェファソン

ルネサンス的万能人とも言うべきジェファソンの多方面の活動は周知のことであって、思想家、政治家、哲学者、教育者、建築家、弁護士、自然科学者、農学者、言語学者、人類学者、民俗学者、デザイナー、発明家などさまざまな面から彼を論ずることができる。しかし、プランターの子として生まれプランターとして死んだ彼の生活基盤は、経済的にも精神的にも農業であり、農業は彼の天職、農本主義 (agrarianism)⁽⁸⁾ は彼の基本的経済思想であった。

彼のプランテーションの規模は、長い生涯の間に変動したが、妻の父の財産を相続したりして財産を増し、大略1万エイカの土地、150人の奴隷、650頭ほどの家畜を所有した。主なプランテーションは、Albemarle 郡で Monticello, Tufton, Shadwell, Lego, Bedford 郡で Poplar Forest, Tomahawk, Bear Creek である(それぞれの郡で約5000エイカずつ)。所有地はさまざまな地形を持ち、大部分森林だが、それでも耕作地は数千エイカに及び、父の代に倍する規模というのみでなく、彼はここで実に多方面にわたる生産を実行した。作物としては、とうもろこし、小麦、たばこを主に、からす麦、大麦、ライ麦、ジャガイモ、アーティチョーク、かぼちゃ、豆、クロウヴァ、亜麻、大麻、綿花など、またりんご、桃などの果樹栽培、そのほかつぎつぎと新種作物の栽培を試みた。また居住地モンティチェロには、野菜畑や花畑のみならず、製釘所、鍛冶屋、指物工場、のこぎり作業場、紡績、織物の仕事場もあった。シャドウエルでは二つの製粉所が活動していたし、他に製靴、火酒蒸溜、醸造、煉瓦づくり、製材、炭焼き、桶づくり、食肉保存、たばこ貯蔵などの作業も行われた。⁽⁹⁾ これらは奴隷および職人の手によってなされ、彼のプランテーションは、主人の不在や度重なる実験のために経済的には成功といえなかったが、プランテーション内の必要物資をほぼ自給するほどに多角経営を営んだのである。

ジェファソンは農業に異常な熱情を抱いていた。それがどんなに大きなものであったかは、この多角経営のみならず、彼のいくつかの手紙と、農事記録からうかがわれる。彼はヴァージニアの内外を旅行して各地の耕作技術、作物の種類、土地使用法などを観察、多くの農学書にも親しんで早くから農事に通じていた。しかし独立・建国の大事業は彼をして農場から遠ざけ、多忙な政務にかかわらしめた。そして Hamilton との抗争に疲れ、対仏関係の悪化に悩んでついにウォシントン大

注(8) agrarianism の語には、農業中心主義と土地均分論の二つの意味があり、“ジェファソンは、このような二面性をもつアグリーアニズムを、一身に体現した最初の代表的アグリーアニアンであった。”富田虎男「ジェファソンと農本主義」、『講座アメリカの文化3、機会と成功の夢』、1969年所収、92ページ。

(9) モンティチェロの花畑はジェファソンの晩年の状態に復元されていて、今でも訪れる人の目を楽しませている。Cf. Edwin M. Betts and Hazlehurst Bolton Perkins, *Thomas Jefferson's Flower Garden at Monticello* (Charlottesville, 1971).

(10) *Thomas Jefferson's Farm Book, with commentary and relevant extracts from other writings*, edited by Edwin Morris Betts (New Jersey, 1953), Preface by Betts, pp. viii-ix.

統領下の國務長官を辞任したのち、次のように書いている。

“私はヴァージニアへ行く。私はやっと来年早々に帰ると決めることができた。それで私は、嫌な政治の仕事から解放され、私の家族、私の農場、そして私の書物のふところに抱かれるのだ。私には、建築すべき家があり、耕すべき畑があり、私のために働く人びとの幸福を見守らなければならぬ。”⁽¹¹⁾

しかし農場に帰ったのも束の間、再び中央政界に引き出され、多彩な政治経歴を2期に及ぶ大統領職と共に終ったのち、また次のように書いている。

“私はいつも考えていた。もし天が私に住む場所と天職の選択を許してくれるならば、良く灌漑され園芸作物の販売に適した市場に近い肥沃の地を私は選ぶであろう、と。私にとっては大地の耕作よりも素晴らしい職業はないし、耕作の中でも園芸は最上である。”⁽¹²⁾

彼の農事記録は二つあり、一つは *Garden Book* (園芸記録)、他は *Farm Book* (農場記録)⁽¹³⁾ で、いずれも半世紀以上にわたる驚くべき克明なもの。アメリカにはそれ以前にかかる記録はなく、多忙な政務のかたわらジェファソンが農業にかけた執念をしのぼせるものがある。

「園芸記録」は1766-1824年秋に及ぶノートで、20.3cm×16.2cm、158枚のうち33枚に記録され、残りは空白のままである。書かれている内容は、園芸観察、天候、監督 (overseers) との契約、道や池をつくる計画、洪水の記録、ぶどうの収穫量など多様で、公務でモンティチェロを離れていたための空白も多い。1784-89年の渡欧期間などももちろん空白である。しかし今日では、Edwin Morris Betts の手によってノートはすべて活字になり、また園芸に関連する他の手紙、*Weather Memorandum Book 1776-1820* などの他の記録類と合わせて編集され、アメリカ哲学協会によって出版されているので、彼の園芸の全貌を容易にうかがうことができる。⁽¹⁴⁾

「農場記録」は、「園芸記録」よりも8年遅れ1774-1826年の農場記録で、正確にはプランテーション・ノートと言うべきもの。「園芸記録」とほぼ同じ大きさのノートで、全部で379ページのうち177ページまでが用いられている。二つの記録の区別はあまり厳密ではないが、こちらは主にアルプマール、ベッドフォード、Campbell 郡のプランテーションの記録で、彼の多種類の記録の中心であり、彼の多角経営の全貌、特に奴隷についての詳しい記録が興味深い。これもベツの編集によ

注(11) To Mrs. Angelica Church, Germantown, Nov. 27, 1793, in *Jefferson Himself, the personal narrative of a many-sided American*, edited by Bernard Mayo (Charlottesville, 1942), p. 190.

(12) To Charles Willson Peale, Aug. 20, 1811, in *Thomas Jefferson's Garden Book, 1766-1824, with relevant extracts from his other writings*, annotated by Edwin Morris Betts (Philadelphia, 1944), p. xv.

(13) ジェファソンは死に際して手紙やノート類をすべて遺言執行人である孫の Thomas Jefferson Randolph に託した。そのうちの公文書類は1848年に政府が買い上げ国会図書館の Divison of Manuscripts に入っており、私的な資料約 7000 点は、1898年にボストンの曾孫 Thomas Jefferson Coolidge が購入してこれを Massachusetts Historical Society に寄贈した。「園芸記録」と「農場記録」は共にこの中にあり、この協会が所蔵している。

(14) 注(12) 参照。全体で700ページを越す。

る写真版が、関連文書、手紙類と共にアメリカ哲学協会から出版され、容易に目にしうる。⁽¹⁵⁾

このようにジェファソンが農事に精励した時代は、またアメリカの農業全体にとっても、転換期であった。イギリス植民地体制のもとで主要産物であったたばこが、本国の規制と奴隷の価格が上がったため利益が少なくなり、プランターは他の収入源を求め、また独立によって本国の重商主義政策から解放されたのちは、特に国内の需要をまかない農業国として先進ヨーロッパ諸国に伍するために農業改良を行う必要があった。⁽¹⁶⁾ ジェファソンの行ったさまざまな試みは、彼自身のプランテーション経営のためばかりでなく、粗雑なたばこ栽培を脱するべき新興アメリカの要請にもこたえていたのである。

先ず農機具の改良のために、彼は1793年にスコットランドから真鍮製の打穀機を輸入しヴァージニアに広めた。⁽¹⁷⁾ また自分で土の抵抗が最も少ない鋤を数理的に設計考案し、⁽¹⁸⁾ その功によって1805年にフランスの学会から金メダルを贈られた。そのほかにも麻をすく仕事を機械化するため、打穀機にくしを取りつけ効果を挙げるなどさまざまな工夫をしている。⁽¹⁹⁾

農業経営自体を改良するためにも、先に触れた多角経営のみならず、奴隷をその適性に依拠して配

注(15) 注(10) 参照。全体で750ページを越す。

(16) たとえばジェファソンは「ヴァージニア覚え書」の質問XX “この州特有の商業特産物、住民がヨーロッパおよび世界の他の地方から入手しなければならない物品についての情報は?” に対して、正面から答えず、たばこは小麦に転換しつつあり、かつそれが望ましいと、次のように述べている。

“1758年には、われわれは7万樽のたばこを輸出したが、それはこのヴァージニアで1年間に生産された量としてはこれまで最高であった。しかしたばこの栽培は、この戦争が始まった当時には急速に減少しつつあり、小麦の耕作がそれにとって代りつつあった。平和の回復後も、たばこの栽培は減退し続けるに違いない。私は、ヴァージニアの気温の変化がたばこに影響するようになったのではないかと思っている。たばこは、良質であるためには、非常な高温を必要とするからである。なおそれ以上にぜひ必要なのは並はずれた肥沃な土壌であるが、たばこが市場で得ている価格からして、耕作者が肥料を使って生産することは不可能であろう。たばこの供給が依然としてヴァージニアとメリランドだけに依存するのであれば、耕作がますます困難となるにつれて価格が高騰するために、耕作者がこれらの困難をのりこえて生活することも可能となるだろう。しかし、ミシシッピ川流域の西部地方やジョージアの奥地には、まだ新鮮で肥沃な土地が豊富にあり、ここより暑い陽光に恵まれているので、前記2州より安い値段のたばこを売ることができるだろうし、そうなればこの2州はたばこ栽培をまったくやめてしまうことを余儀なくされるだろう。しかもそれは、この2州にとって幸いな強制ということになる。というのは、たばこの耕作は、限らない悲惨を生み出すからである。これに従事するものは、自然の力が支えうる限度以上の努力をいつも要求される。彼らはいかなる種類の食料もほとんど栽培しないので、そういう農園に働いている人や動物は劣悪な食料を食べ、土地はたちまち疲弊していくのである。ところが、小麦の栽培の場合には、あらゆる事情がこの逆になる。それは土地を牧草でおおい、肥沃さを保つばかりでなく、労働するものに十分な食料を与え、収穫期を別とすれば適度の労苦しか必要とせず、食用動物や役畜を非常に多く育て、すべての人びとに豊かさや幸せとを分かち与える。われわれの経験では、1000ウェイトのたばこを栽培するよりも100ブッシェルの小麦をつくる方が楽であるが、その上つくれた時の値段もその方がよい。……”

それでもなおわれわれには、たばこという農業部門よりもこの小麦の方に決定的な優位を与えるような切実な要求があるのだ。——小麦の栽培は牧草地を拡大することになるので、その結果アラビア馬をきわめて利潤の高い商品にする。……以上のことの他にも、たばこの栽培をやめることになった場合に重要な代替物になるものはあるだろう。たとえばヴァージニアの東部では綿花、西部では大麻や亜麻、というように。” Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia*, edited with an introduction and notes by William Peden (Chapel Hill, 1955), pp. 166-9. 中屋健一訳 299-304 ページ。

(17) Cf. Letter to James Madison, Sept. 1, 1793.

(18) Cf. Letter to Sir John Sinclair, March 23, 1798.

(19) Cf. Letter to George Fleming, Dec. 29, 1815.

置し、地力を増すために農地を六つに分けて6年周期の輪作を試みた。⁽²⁰⁾ また地味回復のためにさまざまな牧草を実験し、紹介普及した。⁽²¹⁾

ジェファソンは、ヨーロッパの品種をアメリカに移植するのにも先駆的役割を果たしている。外交使節としてヨーロッパ滞在中、彼は農学者の眼をもって各地の農業や品種を観察し、優れたものがあれば、これをアメリカに導入しようと努力した。たとえば、パリでイタリアのピエモンテ地方の陸稲がカロライナ米よりも良種であることを知り、イタリアへ行って種もみを密輸出してサウス・カロライナとジョージアに入れ、この地の米作を改良せしめた。⁽²²⁾ また、アメリカにないオリーブ栽培を広めようと樹500本をサウス・カロライナに送ったが、これは失敗に帰した。⁽²³⁾ 家畜の改良にもつとめ、スペインからはメリノ種羊をアメリカに入れている。⁽²⁴⁾

改良は、害虫駆除や播種法など多方面に及んだのみならず、彼は農業団体の設立にも意欲を燃やし、自ら Albemarle Agricultural Society の中心人物となり活躍、広く農業知識の普及に努めた。当時はヨーロッパにおいても支配階級の間には農芸趣味が流行した時代で、ジェファソンも、輪裁式経営、大経営による農業近代化を説いた Arthur Young と文通するなど、その一翼を担ったわけである。しかし単なる趣味の域を遙かに脱し、科学的な知識・実験・研究にもとづいてアメリカの農業発展に大きな貢献をしたのであって、わが国におけるこの面の先駆的紹介者の一人木村喜久弥は、上記の点を紹介したあとで、次のようにこれを表現している。⁽²⁵⁾

“外国大使や大統領等と多忙な公職生活を送った彼が、以上の如く農業の殆んど全分野に互って顕著な活躍をしたことは、正に驚嘆に値する。……ジェファソンが農業に対し如何に深い愛着を有してゐたかは、彼が大統領就任後も常に自己の職業を「農夫」farmer と書いてゐたことから明かである。……彼は正にアメリカ建国期に於ける典型的な紳農であり「アメリカ農業の父」と称さるべきであらう。”⁽²⁶⁾

注(20) Cf. Letter to George Washington, May 14, 1794.

(21) Cf. Letter to John Taylor, 1794. To James Madison, April 27, 1795.

(22) Cf. Letter to William Drayton, July 30, 1787.

(23) Ibid. および Letter to James Donaldson, 1813.

(24) Cf. Letter to James Madison, May 13, 1810.

(25) たとえば「ヴァージニア覚え書」の質問Ⅵ，“鉱山その他の地下資源、樹木、植物、果実等についての情報”において、ジェファソンはその主なものとして土産の薬用21種、食用35種、装飾用41種、建築用26種、その他イギリス人が最初に訪れた時にヴァージニアで発見したもの、農園・菜園・果樹園で栽培される植物を挙げ、また質問Ⅶ，“人類の知識を増しうるすべてのことについての情報は？”に対して、ヴァージニアの気候につき、降水量、気温、風向の観測資料を示した。Jefferson, *op. cit.*, pp. 73-81. 中屋訳140-152ページ。

1804-1806年の Meriwether Lewis と William Clark の有名な探検を彼が促進した目的の一つは、西部の植物を東部に持ち帰り移植することであった。

(26) 木村喜久彌「ジェファソンと農業」、『三田学会雑誌』42巻7・8号、1949年8月。

3. 農本主義者ジェファスン

学者というよりは常に實際家であったジェファスンは、独立宣言を始めとする数々の公的な重要文書、法律案、および2万通とも言われる膨大な手紙、農事録その他ノート類を書き続けながらも、まとまった書物を記さなかった。生前に出版された唯一の書は、比較的初期の*Notes on the State of Virginia*であり、これとても決して体系的なものではなく、アメリカ13州の地理、人文、産業などを調査すべしというフランス政府の指令を受けた駐米フランス公使館書記官 François Marbois 侯の質問に答えて、ヴァージニアの諸問題を説明するというかたちをとっている。質問内容は、州の地理、動植物、人口、陸海軍、インディアン、法律・政治制度、教育、王党派の処遇、宗教、奴隷制度、歴史書など複雑多岐にわたり、経済に関しては、工・商・貿易、特産品、輸入品、貨幣制度、財政などで、ここでジェファスンの経済思想が、彼の断片的な資料の中では最も包括的に語られているわけだ。

その中で特に有名なのが国民皆農論とも言うべき彼の農本主義であって、質問XIX “工業、商業、内外通商の現状は？”に対して次のように書いている。

“ヨーロッパの政治経済学者たちは、あらゆる国家は自力による工業生産に努力すべきだということを一つの原理として樹立した。この原理をわれわれは、他の多くの原理と同じように、しばしば異った結果を生み出す環境の相違というものを考慮せずに、アメリカに移入している。ヨーロッパでは、土地がすでに耕作しつくされているか、または耕作者に対して全く閉ざされた状態にある。その結果、余剰人口を支えるためには、選択によってではなく必要上、工業に頼らざるをえないのである。けれどもわれわれの場合には、農耕民の勤勉を誘う無限の土地がある。だとすると、われわれすべての市民が土地の開発に従事するのが一番いいのだろうか。それとも、市民の半数が農業をやめさせられて、他の半数の人びとのために製造業と手工技芸を行なうのが一番いいのだろうか。もし神が選民を持つとすれば、大地に働く人びとこそ神の選民であって、神はこれらの人びとの胸を、確実に純粋な美德のための特別な貯蔵所として選んだのである。それは神があの聖火を燃え続けさせる中心点であって、それがなければ聖火は地表から消え失せるかもしれないのだ。耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民の間にも実例のあったためしがない。道徳の腐敗は、農耕民のように自分たちの生存のために天に頼り自分の土地と勤勉に頼ることをしないで、自分の生存のために顧客の不慮の災害や気まぐれに依存しているような人びとに押されたしるしなのである。依存は卑屈や金銭本位の考えを生み、美德の芽を窒息させ、野心のたくらみに都合のよい道具をつくり出す。このことは、工芸の自然な進展とその当然の結果であって、偶然

の環境のおかげでそうなるのが遅らされたことも時にはあった。しかし一般的に言えば、どの国家においても、農耕民以外の市民階級の総計と農耕民の総計との比率は、その国の不健全な部分と健康な部分との比率なのであり、またそれは、その国の腐敗の程度を測る絶好のパロメーターである。だから、耕すべき土地をわれわれがもっている限りは、わが市民が仕事台にへばりついたり、糸巻竿をくるくる廻したりするのを決して見たがらないにしよう。大工や石工、鍛冶屋は、農耕には含まれない。けれども、製造業を全般的に経営するということについては、われわれの作業場をヨーロッパに残しておくことにしよう。食糧と原料をヨーロッパの労働者たち (workmen) のところへ運んでいく方が、彼らを食糧と原料のあるこの土地へ連れてきて、彼らと一緒にその習慣や考え方をもちこんでくるよりは、望ましいのである。大西洋を越えて商品を持っていくことによる損失は、われわれの幸福と、政治体制の永続ということとで十分に補われるであろう。大都市の暴民が、純粋な政治体制の支えを強めることにならないのは、種物が人間の体力を増さないのと、ちょうど同じようなものである。一つの共和国を生き生きとした状態に保つものは、人民の習慣と精神とである。習慣と精神の墮落は、たちまちにして共和国の法律と憲法の核心にまで食い入る潰瘍なのである。⁽²⁷⁾

すなわちここでは、

{ ヨーロッパ……既耕、閉鎖的→工業
 { アメリカ……未耕、開放的→農業

の地理的・社会的差が強調され、両者をへだてる大西洋の意味が強調され、

{ 農民……天・土地・勤勉に頼る。道徳的。
 { 非農民……顧客の不慮の災害や気まぐれに依存。卑屈、金銭本位、野心。

の対比から、アメリカの農本主義、道徳的優位、それを守るための農工国際分業が説かれている。ジェファソンの説明では、非農民の性格は商人のように思えるが、それが労働者に転嫁され、大都市の市民一般の非道徳性にまで拡大されている。このような農民信頼、非農民不信の感情は、もちろん彼の農業に対する愛情から発するものだが、後に彼が目にした封建制下のヨーロッパの大都市の実情が、その確信を強めたと言えよう。彼の求める共和制=ディモクラシは、こうした自由・独立・健康・幸福・愛国的で有徳な農民を基盤にして形成されるのである。

「ヴァージニア覚え書」には、もう一カ所で農本主義の繰り返しがある。すなわち質問 XXII “歳入および歳出は？” に対して州の財政状況を説明し、平和主義の立場から独立戦争後の軍事費削減を主張、次のような極論を展開する。

“またおそらく、戦争の誘因をできるだけ取り去るため、われわれは海洋を完全に放棄して

注(27) Jefferson, *op. cit.*, pp. 164-5. 中屋訳 296-298 ページ。

しまう方がよいかもしれない。海は、われわれを他の国家と争いあう危険にさらす主な場所だからである。そして、われわれが欲するものを運んできたり、われわれが他に分けてやれるものを運んでいったりする仕事は、他の国々に任せてしまうことだ。こうすれば、ヨーロッパの国々にとって戦利品となるようなわれわれの財産が海上には全くないのだから、ヨーロッパの国々からわれわれが攻撃されることはなくなるであろうし、わが市民をすべて大地の耕作にふり向けることになるであろう。しかも、もう一度くり返すが、大地に耕作する者は、最も有徳でかつ独立した市民なのである。もはや陸上には仕事が見当たらないという時が来たら、海の上の仕事を探すことにすればよいであろう。⁽²⁸⁾”

これはジェファソンの理想であって、彼自身もこれが実現されえないことを知っており、“とはいえわがヴァージニアの住民は、実際の習慣から通商に愛着を持っているので、自分たちの力でそれを行っていくことであろう”と認め、そうなるに戦争の危険があるから、敵国の分遣隊に対抗しうる程度の小海軍を持つことを提案する。しかしできることなら、海運業も廃し、従って軍隊も廃し、通商を外国にゆだねて平和な農民共和国をつくりたかったのである。

こうして「ヴァージニア覚え書」に示されたジェファソンの理想国の原型は、農産物の輸出、工業品の生産・輸入を外国人にまかせ、高い道徳を維持する農民共和国である。彼の階級概念は不明確で、農民といっても独立自営農、借地農、プランテーションにおけるプランターおよび奴隷などが考えられるが、奴隷制をなくし独立自営農および中位の富農と農業労働者のみの社会が頭の中にあっただけであろう。もちろん農業生産を円滑に行うためには商業・工業を全く排除するわけにいかないもので、農業に付属する少数の職人と国内商品流通のための商人は許容されるはずである。

このような農民讃美はジェファソンだけのものではなく、“pastoral という語は、単に agricultural とか bucolic (牧歌的) という以上の意味を持っていた。さらに重要なことに、その語は、アリストテレス、キケロ、ヴェルギリウス、ホラティウスなどからアディソンやフランス重農主義者たちに至る、西欧思想の長い田園主義的伝統の倫理的理想や生活様式を意味していたのである。”

“確かに、大部分のアメリカ人は古代ローマの田園主義者についてほとんど知識もなく、またジェファソンも体系的な田園主義の論文を書いたわけではなかった。しかしジェファソンの著述やアメリカのさまざまな出版物は、至るところに田園主義的価値観を反映していた。ジェファソンの重要な貢献は、この価値観を、事実上すべての法律、書簡、行政上の声明文、そして彼が新国家のために書いたあらゆる宣言書に織り込んだことであつた。このようにこの価値観が^{おおやけ}公の政策に生かされ、永続性と深遠さを持っていた結果、ジェファソンの経歴は、単に巧妙な政治家としてではなく、雄大な構想を持った政治家として評価されることになったのである。当時、ジェファソンの姿が他

注(28) Ibid., p. 175. 中屋訳 313 ページ。

に抜きんで高くそびえ立ち、またそれ以来今日まで、われわれの国民生活に「ジェファソンの」⁽²⁹⁾ 伝統が存続しているのは、ここに由来する。”

農民讃美は、ジェファソンの家業や故郷ヴァージニアの美化というだけでなく、広く農本主義の長い伝統の中に彼を位置づけ、さらに文明に汚れたヨーロッパに対する新興アメリカの素朴な純粋な姿を際立たせるのに効果的であった。それは当時人口の9割を占めていたアメリカの農民たちに自信と希望を与え、また新大陸に対するヨーロッパ人の畏敬の念を深めることとなったのである。

「ヴァージニア覚え書」が執筆されたのは1781年であり、80年代（青年時代）は農本主義的考えが強いことは、次の手紙からもうかがわれる。

1785年8月23日、John Jay へて——

“現在われわれには、無数の人民を耕作に従事させるのに十分な土地があります。大地を耕すものこそ、一番貴重な市民です。彼らは最も活気に満ちた、最も独立心の強い、最も徳の高い人たちで、しかも最も永続的な紐帯によって、祖国とつながっており、祖国の自由と利害に結びつけられています。ですから、この大地の耕作という仕事が終わらない限りは、私は彼らを水夫とか職工 (artisan) とかそのほかのどんな職業にも変えさせたくありません。国の内外の需要に対してわが市民の生産はもとよりわが国の人口が過剰になるまでは、わが市民は耕作という仕事を見つけ出すことでしょう。そういう事態はまだ起きていませんし、多分将来もかなりの間起らないと思います。そういう事態になりましたらすぐに、過剰な労働力を何かほかの職業にふり向けねばなりません。その場合には、私は多分、過剰労働力を工業よりはむしろ海運業にふり向けたいと思うでしょう。なぜかと申せば、この二つの社会層の性格を比較してみますと、私には、水夫の方がもっと貴重な市民に思えるからです。私は職人 (artificers) 層は悪徳の仲介者であり、一国の自由を全般にわたってひっくりかえす道具であると思っています。”⁽³⁰⁾

ここでは農民の次に望ましい市民として水夫が登場する。水夫を有徳とする積極的な理由は示されていず、貿易商人、商業資本などについては何も触れられていない。水夫を貴重な市民と認めるにしてもかなり消極的なことは、同年の次の手紙からもうかがわれる。

1785年10月13日、G. K. van Hogendorp へて——

“わが諸州に通商を奨励することの得失について、私がどう考えているかのお尋ねですが、私自身の気ままな考えを述べるとすれば、諸州は通商にも航海にもたずさわらないで、ヨーロッパとの関係においては、丁度中国のような立場にいたらよいと私は思います。われわれはこ

注(29) Ralph Ketcham, *From Colony to Country: the Revolution in American Thought, 1755-1820*, 1974.

佳知晃子監訳「アメリカ建国の思想」, 261-262 ページ。

(30) *The Papers of Thomas Jefferson*, edited by Julian P. Boyd, Vol. 8, (Princeton, 1953), p. 426. 邦訳はソール・K. ・パドヴァー編、富田虎男訳「ジェファソンの民主主義思想」, 1961年, 77-78 ページにある。

にわが国の人口が非常に増加して、その結果わが国の農業生産が、それを求めにくる国々の市場で供給過剰となるほど増大した時には、農民はそのあまった時間を工業に使わねばならないか、もしくはわれわれの過剰な労働力が工業ないし海運業に雇われねばなりません。けれども、その日は遠い将来のことだろうと思います。ですからわれわれは、ヨーロッパが原材料や食糧品さえもアメリカから輸入している間は、われわれの工業労働者 (workmen) をヨーロッパに長くとどめておくべきです。⁽³¹⁾

ここでは商業も海運も外国にまかせた国民皆農論が強力に説かれ、農業生産が外国市場において供給過剰となった時に初めて過剰労働力を工業と海運業に向けるという認識である。

こうした農本主義を掲げたままウォシントン大統領下の国務長官となり、工業主義者で北部の金融資本の代弁者ハミルトンと争ってのち故郷の農場に引退したジェファソンは、2年ののち再び中央政界に引き出され1801年には大統領となった。しかし大統領になっても農本主義を抱き続けたことは、その就任演説において、公約の一つとして“農業およびその侍女としての商業を振興すること”⁽³²⁾を掲げたことによってもわかる。もちろん国政の責任者として、工業を無視することは許されず、“農業、製造業、商業および海運業は、われわれの繁栄の4本の柱であり、最も自由に個人企業に委ねられたときに最も活動的になる”⁽³³⁾(第一次年頭教書, 1801年)、“農業者、製造業者、商人および海運業者の利益は非常に密接に結びついているので、それらすべてを正しく均衡させておかねばならぬ”⁽³⁴⁾(Lithgow 著, 1805年)と説かれてはいる。しかし大統領職にあった1804年2月1日に経済学者 Jean B. Say にあてた彼の経済論は、依然として次のようなものであった。

“わが国とヨーロッパの古い国々との環境の違いから、政治経済学の諸問題において論証の基礎となる事実の違いがあります。……例えば、ヨーロッパでは食糧の量は固定しています。あるいは緩慢に算術級数的にしか増加していません。……ところがアメリカには、巨大な面積の未耕作の肥沃な土地がありますから、働くものは誰でも若くて結婚でき、幾人でも家族を養うことができます。そこで、わが国の食糧は、われわれの働き手の数に比例して幾何級数に増加しますから、わが国では、出生がどれほど増えても大丈夫だということになります。

また、ヨーロッパでは労働力の最もよい配分は、工業労働力を農業労働力と並存させること、つまり、そのようにして、一方が両方に食糧を供給し、他方がまた両方に衣類その他の生活用品を供給することだ、と考えられています。わが国でもそうするのが一番よいでしょうか？
利己心や一寸見た目から言えば、いかにもその通りだと言えます。それとも、わが国の働き手

注(31) *Ibid.*, p. 633. 前掲訳78ページ。

(32) *Thomas Jefferson on Democracy*, selected and arranged with an introduction by Saul K. Padover (N. Y., 1939), p. 33. 富田訳31ページ。

(33) *First Annual Meesage*, *ibid.*, pp. 158-9.

(34) *Ibid.*, p. 159.

がみな農業に従事した方がもっとよいでしょうか？ この場合には、2倍も3倍もの肥沃な土地が耕作されることになるでしょうし、2倍も3倍もの食糧の生産が新しく行われて、その余剰はヨーロッパに運ばれ、現在飢えのため死んでいく赤ん坊を養い、その人たちが大きくなって、われわれに衣類その他の生活用品を製造して、食糧と交換にわが国に送ってくるようになるでしょう。道徳はこの方に耳を傾けますし、また自然の法はわれわれの義務と利害をそのようにきちんとかついているのです。……この問題を解決するに際して、われわれは、工業に従事する人よりも農業に従事する人の方が道徳的にも肉体的にもより優れているという点を、正当に重視せねばなりません。職務上、私はただ問題を問うことだけしか許されません。たとえ私が参考資料を持っておりましても、職務上この問題に解答する場合にはありません。⁽³⁵⁾”

このように彼の国民皆農論は、国民経済上の利益からではなく、世界経済上の利益と道徳上の視点という二重の観点から主張されていることが、改めて確認されなければならない。農民の道徳的優位についてはすでに見たところであるが、ここで彼の各階級および職業に対する考えを例示してみよう。

農民：

“勤勉な農民は、自分の家柄を鼻にかけ誇りばかり高く働かず、他人の労働の余剰——それは救いなき貧者の神聖な基金なのですが——に寄食することによって惨めな生存を長びかせている怠惰なのらくら者よりも……人間の等級においてはもっと高貴な地位を占めています。⁽³⁶⁾”
(De Meunier 著、1786年)

“農業階級は有用性においては第1位に位する階級であり、また第1に尊重さるべき階級です。……農業はまさしく第一級の科学です。農業は、その侍女の中に、化学・物理学・工学・数学・博物学・植物学のような、最も尊敬に値する科学を数えることができます。あらゆる専門学校・大学において、農業の講座とその科の学生が、第1位の名譽を与えられてもよさそうなものです。⁽³⁷⁾” (David Williams 著、1803年11月24日)

商人：

“商人は祖国を持たないのです。商人には、自分が立っているというだけの場所は、儲けを引き出す源泉に対するほどの強い愛情を感じさせないのです。⁽³⁸⁾” (H. G. Spafford 著、1814年3月17日)

僧侶：

“僧侶はどここの国でもどの時代にも、自由の敵でありました。僧侶はいつも専制君主と同盟して、自分自身を保護してもらう代りに君主の権力濫用をそそのかしているのです。富や権力

注(35) Ibid, pp. 70-71. 富田訳80ページ。

(36) Ibid. 富田訳92ページ。

(37) Ibid., p. 89. 富田訳103ページ。

(38) Ibid, p. 84. 富田訳97ページ。

は、君主と結びついた方が、それを受けるにたるだけの価値のあることをするよりも、もっと容易に獲得できます。そこで僧侶たちは、これを効果的に行おうとして、これまで人間に説かれたうちで最も純粋な宗教をねじまげ、人類の誰にも理解できない、したがって彼らの目的には一層安全な道具である、神秘的教義やわけのわからぬ言葉にすり換えてしまったのです。”(同上)

法律家：

・“法律家たちは、母国イギリスでは、一般に彼らの憲法の自由な原理の最も強い支持者でした。しかし母国でも彼らは変わってきています。この原因の大半は、基本的著作とみなすものをわがヨーク卿からブラックストンに変えたことにあると私は思っています。事実、ブラックストンとヒュームの書は、全イングランドのトーリ黨員をつくりましたし、また、自らの生れつきの独立の感情よりもヒュームとかブラックストンのようなずるい詭弁に優位を与えている若いアメリカ人たちのトーリ黨員を、つくりつつあります。……

私は、武力攻撃を受けてもわが国の自由はびくともしないと思っていますが、イギリスの書物や、イギリスの偏見や、イギリスの習慣や、またわが国の専門職人 (professional crafts) の中に、それを猿まねする人や、それにだまされやすい人や、陰謀をたくらむ人たちを沢山眼にした身に感じてきて、その方が武力の攻撃よりも恐しいと思っています。このような誘惑に對抗する保障を求めて自分の身辺を見廻しますと、私は、わが農業市民の広範な存在の中に、すなわち、必要とあれば、わが国の都市のヒューム主義者たちを粉碎して、われわれがイギリスから分離したあの諸原理を維持する、わが農業市民の純朴な精神、彼らの独立心、彼らの力の中に、それを見いだすのです。”(同上)

金融資本家：

“われわれは、現在銀行紙幣の氾濫によって、以前の大陸紙幣の場合と同じように、破滅にひんしています。個人の財産におけるこのような逆転が、貪欲な投機家たちの思いのままにされねばならぬというのは悲惨なことです。この投機家どもは、資本をいくらか持っておりますと、それを工業や商業やそのほかの有益な仕事に用いないで、財産のあらゆる交換を、彼らの詐欺的な濡れ手で粟の利潤を獲得する手段としているのです。”⁽³⁹⁾ (T. Cooper 著、1814年1月16日)

ジェファソンの他階級に対する反感にはやや誇張があり、特に公職を離れていた時には極端論を展開したようだ。しかし彼が農業に特別な愛着を持っていたこと、貨幣追求欲、独占、非生産的にして有害な大銀行などに強い敵意を持っていたこと、労働者階級に対しては未熟な考えしか持っていなかったことは確かである。

(経済学部教授)

注(39) *Ibid.*, p. 77. 富田訳89ページ。